海外渡航時のワクチン接種と風土病

国立国際医療研究センター国際感染症センター
竹　下　　望
（聞き手　池田志李）

企業のグローバル化に伴って、海外長期出張者の増加が見られ、特に東南アジアに出張する人が増加しています。そこで海外渡航時のワクチン接種の必要性、海外での風土病の現状についてご教示ください。

＜兵庫県開業医＞

池田　海外渡航時のワクチン接種と風土病、これはすごく大きなものを含有した質問ですけれども、この中で特に重要なもの、あるいは最近新しく認知されているようなもの、こういったものがありましたら、お話をうかがいたいと思います。

竹下　確かに、非常に大きいテーマになりますので、通常、私たちがどのような考えで診療しているかというかたちで説明させていただきたいと思います。

外国に行かれる方というのは最近非常に増えてきていますし、渡航する場所も各地に増えています。そういった中で、私たちは事前に、旅行に行く前に相談を受けます。基本的にどういうことを中心に問診するかというと、まず渡航する地域、国名を聞いて、国の中でもどのようなところに行かれるかというのをうかがっています。

次に、渡航期間です。例えば、旅行の形態として、パックツアーで数日間行かれる方もいらっしゃれば、１カ月、２カ月間の中期の出張、または年単位の赴任というかたちで行かれる方もいらっしゃいます。このようなことをおうかがいします。

また、赴任の形態でも、首都に滞在する方もいらっしゃれば、農村や、やや辺境の地域に入りまして、現地の人とかなり濃厚な接触をする方、または野生動物の観察など、自然に濃厚に接触する方もいらっしゃいます。このような方の場合は特に重点的に説明させていただきますし、ほかの方に比べて

やや多めにリスクのことをお話しして、予防に努めるように説明いたします。

池田　以前に日本にもマラリアがあったという話をうかがっているのですけれども、特にマラリアの流行地域については、どのようなアドバイスをされておりますでしょうか。

竹下　マラリアは非常に重要な病気です。なぜかといいますと、健康な方でも発病して、治療が遅れる場合は重篤化して、亡くなることがあります。昨今では現地の医療機関でもかなりの治療ができるようになってきていますが、依然として、日本人でもかなり重篤化しているという報告があります。そこで私たちは、流行地域に行かれる方に関しては、マラリアの予防内服について説明することがあります。

特に流行地域といいますと、一番多いのはアフリカの中でも特に西アフリカ、またパプアニューギニアといった地域が重点的になります。また、それ以外にも、東南アジアの一部や南アジア、またアフリカのその他の地域、中南米の一部というところが流行地域になりますが、そういった地域で渡航の内容や渡航期間に合わせて説明させていただきます。

ただ、残念なことに、日本国内で使えるマラリアの予防内服というものが、世界標準と比べると少ないということが現状です。

現在、日本で認可されている薬はメフロキンになります。この薬は、週に１回、出発する少なくとも１週間前から飲み始めていただいて、リスクのある地域を出てから１カ月間飲んでいただくという特徴があります。非常に副作用も少ないといわれている薬ではあるのですが、中にはふらつくとか、めまいが出るといった方がいらっしゃったり、もともと精神的な疾患がある方の場合は少し落ち込んだりと、精神的な副作用が出るということがいわれています。ただ、特に合併症がない場合は１週間に１回でいいということで、非常に内服がしやすいという特徴があります。

それ以外の薬でいいますと、ドキシサイクリンになります。日本国内では抗生物質として利用されていますが、この薬は保険適用外にはなりますけれども、入手することが可能です。この薬はリスクのある地域に入る２日前から毎日飲んでいただきます。そして、リスクのある地域を出てから１カ月間飲んでいただきます。この薬の特徴としましては、マラリア以外の一部のほかの感染症に関しても予防効果がありますので、特に森林に行かれるような、自然との濃厚な接触をする場合はこの薬が非常に有用だと思います。ただ、抗生物質ですので、中には胃腸の調子を悪くしたり、めまいが出たりという方もいらっしゃいます。あと副作用として強く指摘されているのは、光線過

敏症など皮膚症状がやや強く出る方がいらっしゃいます。

日本国内では認可されていませんが、マラロンという薬も非常に有効性が高いといわれています。この薬は、リスク地域に入る２日前から毎日飲んでいただきます。ただし、この薬の一番の特徴は、リスクのある地域を出てから１週間で内服を終了していいとされている点です。この薬は欧米を中心に非常に有用に使われているのですが、日本国内では残念ながら今の段階では認可されていません。

池田　いろいろなお話をうかがいまして、前後で用意周到に準備してその地に向かうということが重要だということがわかりました。海外に一般の方々が出られるときに、どこに相談すれば、そういったワクチン等あるいは指導を受けることができるのでしょうか。

竹下　一般的にはトラベルクリニックという形態のクリニックにご相談いただくのが一番いいと思います。ただ、実際、日本国内全体に十分な数のトラベルクリニックがあるかというと、残念ながら現状ではまだ十分ではないと思います。首都圏とか大都市ではかなり広がってきているのですが、一部の地域ではなかなか難しいということを患者さんから聞くこともあります。また、相談ということであれば、最寄りの検疫所のほうである程度のアドバイスを受けることもできます。

池田　もう一つうかがいたいのは、日本でもうすでに流行している、あるいはワクチンを受けているような風疹とか麻疹、そういったものを北米とかでいろいろな治療を受けに行かれる方とか、そういった方たちへのアドバイスをいただければと思います。

竹下　海外でのワクチンということで、どうしても開発途上国へのワクチンというのが注目されるのですが、実際には、今ご指摘があったような、ほかの先進国に行くときでもワクチンが必要になることがあります。一つは留学する場合なども、日本国内の現在行われている定期接種では、米国など現地の国の接種回数を満たさないということがありますので、追加接種が必要になることがあります。

また、そのことと関係するのですけれども、日本から先進国以外でも長期に赴任する場合、やはりワクチンの接種回数というものを十分に考えて接種することをお勧めします。特に、若い女性で妊娠を今後考えている方などは、日本では麻疹、風疹のワクチンの回数が最近２回になりましたが、まだ１回しか接種していない方が多いので、追加接種することをご説明しています。

池田　海外に行かれて、その後、帰国時あるいは帰国後の注意点についてお話をいただきたいと思います。

竹下　海外から帰ってきて一番問題

になるのは、やはり発熱です。特に、帰国して１カ月以内の発熱というのは注意していただきたいと思います。なぜかといいますと、特に一番問題になるのはマラリアですけれども、マラリアに関しましては、適切な治療を早めに受けることが最も重要になります。ですので、例えばなかなか診断されないという状態や、ご自身で風邪薬や解熱剤などで少し様子を見ながら数日を過ごすということが、全身的に非常に悪化するという傾向にあります。当院でも、マラリアの患者さんは重症から軽症までみることがありますが、やはり重症化して入院される方というのは診断までに時間がかかっている方になります。ですので、最寄りの医療機関に行った場合は、自分がどこに行ってきたかということをぜひ医療者にお伝えください。

池田　帰国時ですと検疫がありまして、そのときの発熱の状態とかで、検疫官の方に適切な医療機関を紹介していただけるのですけれども、例えばマラリアの高頻度な地域から戻ってきた場合に、具体的にどの機関に、例えば保健所とか、相談すればよろしいのでしょうか。

竹下　検疫所を通過する際に聞いていただくと、最寄りの医療機関を教えていただけます。

池田　もし検疫時には発熱がなくて、帰国後、発熱といった場合も、やはり検疫所に相談するということで対処していただけるのでしょうか。

竹下　検疫所に問い合わせればもちろん教えていただけるのですけれども、実際に帰国した後であれば、相談先としましては、検疫所等もありますが、私の勤務しております国立国際医療研究センターでも随時受けておりますので、お電話いただければと思います。

なぜかといいますと、診断に関しまして適切な検査を選択する必要があるということと、もう一つは治療薬の問題があります。残念ながら、日本国内で熱帯感染症に関する治療薬というのは、必ずしもすべて保険適用されているわけではないという面があります。ですので、ぜひ最寄りの医療機関でも、特にそういうところを相談していただきたいと思います。もしわからない場合は、例えば私たちの国立国際医療研究センターなどに電話していただければ、住んでいる地域をうかがって、近くの病院をある程度ご案内できると思います。

池田　いずれにしても、渡航前が一番大切な対処法だと思われますけれども、それは外務省とか、いろいろなホームページを拝見すれば、渡航先の重要な感染症などは情報を入手できるのでしょうか。

竹下　ホームページの情報というのはかなり詳しく書いてありますので、ある程度の情報は入手できると思いま

す。ただ、実際どういうワクチンを打つかということに関しましては、マラリアの予防内服も含めてですけれども、いろいろうかがったのちに判断することが多いので、できればトラベルクリニックにご相談いただければと思います。

池田　ありがとうございました。